

ウイメンズ ブックス 第33号

1989年
11月20日発行
(年会費 1,800円)

Women's Books

602 京都市上京区下立売通西洞院西入る

ウイメンズ ブックストア

TEL.FAX 075-441-6905

発行所 有限会社 松 香 堂 書 店

振替貯金口座 京都8-7950

——女性の本と女性の為の情報をお知らせするウイメンズブック友の会会報——

ウイメンズ ブック 目 録 (33)

このリストの書籍を御希望の方は、同封の振替用紙の通信欄でお申込み下さい。書籍代は送料共でお振込み下さいますようお願い致します。

ご注文の本の定価の合計額に、右の表の送料を合せてお送り下さい。なお、お電話でのご注文も受け付けています。

1,000円以下の場合	300円
1,001円～ 3,000円の場合	400円
3,001円～ 5,000円の場合	500円
5,001円～10,000円の場合	600円
10,001円以上の場合	700円

老後問題

(50音順)

〔あ行〕

『あなたの「老い」をだれがみる』 大熊一夫

朝日新聞社 1986年 1133円 (税込)

「ボケ老人」「寝たきり老人」問題に鋭く切りこんだ本。現代姥捨病院の実態。ボケ研究の現状、老いをとりまく環境の改善と高齢化社会の展望をさぐる。

『生きててよかった—新しい老人ホームを求めて』

石原美智子 ミネルヴァ書房 1986年 1442円 (税込)

岐阜県池田町にある世界的水準の特養ホームサンビレッジ新生苑。老人ホームを病院の営利に結びつけてはならないようにと病院の父とその娘の著者が5年計画のち、本書のようなホームをつくった。地域の高齢者に開かれた老人ホームのモデルとして参考になる。

『いのちを見つめて生きる』黒田輝政編 谷 嘉代子他

ミネルヴァ書房 1989年 4月 1800円 (税込)

人間の生と死を考えるセミナーの記録。信仰・宗教と死、死と終末期の意識調査他。

『家で死ぬ—柳原病院における在宅老人看護の10年』

大沼和加子, 佐藤陽子 勁草書房

1989年10月 2270円 (税込)

「理想の死に方は？」という問いに「自宅の畳の上でコロリと死にたい」というひとが多い。地域に開かれた老人医療の一つの試み—在宅訪問看護10年の記録。

『美しく老いるために—シルバーセックス』 鈴木 清
みずらみ書房 1986年 1236円 (税込)

中高年のために書かれた性の手引書。妊娠の心配のない更年期後こそセックスをエンジョイしよう、特に老年の女性の結婚はタブー視されてきたが女性の平均寿命が男性よりも長いことから女性の老婚も増えてもいいはず。老年期の性に関する本は日本にはまだまだ少ない、今後老人問題を考えるうえで、本書のような本も読みたいものだ。

『老いとは何か—老い観の再発見』 森 幹郎

ミネルヴァ書房 1989年 9月 1400円 (税込)

生物的な老いと社会的な老い、社会のもつ老い観の変遷、変貌する死の姿、変わってきた私の老い観など老年学者が語る老い観。

『老いを設計する』

沖藤典子 亜紀書房

1985年 1545円 (税込)

老いにあえぐ家族、ホームにみる老いと家族、死をめぐる家族、末期医療のあり方など老後問題のエキスパートが老いの諸問題を語る。

『老いを看とる—人生80年時代の老年学』 沖藤典子

創元社 1988年 1300円 (税込)

親の世話は“男子直系”の家制度でなすべきこととする考え方がまだ根強い。“長男の嫁”“男兄弟の嫁”“実の娘”がそれぞれ対立する。これからの老人介護は男女の協調なくしては乗りこえられない。また「老いの身ひとつ、なんとか自分で守りぬこう」とする自分の生は自分で全うする生き方と姿勢と社会のケアシステムの充実の両方が大切だという。

『夫と妻の老い支度』

重兼芳子 海竜社

1985年 1133円

55歳になったとき“食事づくり”からの停年宣言をしたという。

『親と再び暮らすとき家族で父を看取る』

高見澤たか子 大和書房 1988年 1339円(税込)
 子ども4人のうちだれが妻に先立たれた父を引きとるか？ 父親を引きとることになった著者がその父親を看取るまでの体験記。妻の方が先に逝くとは思っていなかった老男性のゆくえは多難だ。

『女・老いをゆたかに—第2回女性による老人問題シンポジウムの記録』

樋口恵子 黒田輝政監修
 ミネルヴァ書房 1984年 1545円(税込)
 激論・老人問題はなぜ女性の問題なのか。早川一光・樋口恵子 おんなの老後・おとこの老後他。

『女・老いをたのしく—第3回女性による老人問題シンポジウムの記録』

樋口恵子監修 ミネルヴァ書房
 1985年 1751円(税込)
 シンポジウム・高齢化社会を支える教育と文化 座談会・熟年に乾杯 50代～80代のファッションショーなど。

『女は三度老いを生きる』

高原須美子 海竜社
 1981年 1009円(税込)
 このたび経済企画庁長官に就任した著者の本。老後の経済設計を中心としたライフスタイルを考える本。「女は三度老いを生きる」—老親・夫・そして自分の老いを。この役割はなぜ「女性」なの？

『女ひとり生きる』

谷 嘉代子 ミネルヴァ書房
 1982年 1236円(税込)
 先の大戦で男たちが戦死し、同年代の女性たちの中には生涯の独身をよぎなくされるひとたちが続出。そんな女性たちが集まって老後をひとり身で生きる知恵を語った本。「女の碑の会」の情報もある。

〔か行〕

『家族・第三の転換期』

袖井孝子 亜紀書房
 1985年 1545円
 戦後の日本の家族は、家制度の廃止と高度経済成長によって二度の転換期を迎えた。いま家族は第三の転換期——高齢化社会の到来を迎えている。家族の再編成を余儀なくされている日本の家族。

『かわいい嫁 素敵なお姑さん』

毎日新聞「女のしんぶん」編 リヨン社(二見書房発売)
 1987年 773円(税込)

毎日新聞「女のしんぶん」嫁・姑情報コーナーに寄せられた嫁・姑関係の本音が収録されている。いさかきがあっても当然、不満があっても当然、女性の自立性が高まればもう少し風通しがよくなるのではと。日本の嫁・姑問題は実は日本の男性問題であるのではとってしまった。女同士のカットウなんてもうそろそろおさらばしませんか？

『ふたりで地球を気まま旅』

来栖琴子 ミネルヴァ書房
 1989年10月 1854円(税込)
 お金をかけず、行きあたりばったりで続ける旅。アクティブ夫婦のフルムーン海外版。

『更年期を生きる』

駒野陽子、俵 萌子他著 学陽書房
 1985年 1236円(税込)
 いまどうしても“更年期を生きる女たちの本”がほしいと考えた女性たちが話し合いを重ねて体験談、インタビューなどをまとめたもの。

『高齢化の主演は女』

菊池幸子 協同出版
 1989年6月 1200円(税込)
 このタイトルは高齢化社会の研究者の持論。女性のライフスタイルとサービス、美しく老いるための自助努力、老後の設計他。

〔さ行〕

『最新・年金パスポート』

川村匡由 ミネルヴァ書房
 1986年 1236円(税込)
 新国民年金、新厚生年金、新共済年金など制度別に自分の位置をわかりやすく解説。

『在宅ケアの展開—まごころサービスハンドブック』

黒田輝政、兼問道子編 ミネルヴァ書房
 1989年3月 2369円(税込)

『女性が相続で損しない法律の知恵』

小川 修
 自由国民社 1986年 1442円(税込)
 女性の側に立った相続の手引書。相続に関しては女性は実家を出て嫁に行き、兄弟が女性相続人に相続放棄を求めるケースが未だに多い。

『自分の老いとつきあう』

西沢江美子 学陽書房
 1987年 1339円(税込)
 自分の老いは自分でつくる、人間関係を大切にすると人生は老いに対しても積極的に立ち向かえる知恵も。いきいき生きる元気印のお年寄りたち。

『シルバー・コミュニティ論』

原田正二編著
 ミネルヴァ書房 1988年 2060円(税込)
 住民参加の活動や福祉の町づくりをどう進めるか、新しい在宅老人福祉の構想を展開。

『人生は六十過ぎが面白い』

石垣綾子 海竜社
 1986年 1133円(税込)
 生涯現役の心意気で愉しく美しく老いを生きる著者の人生論。

『すこやかに老いる』

一番ヶ瀬康子 ドメス出版
 1984年 875円(税込)
 社会福祉の専門家の著者が“灰色の共倒れ社会”にしないための老いの知恵を語る。読易い大きな活字を使用。

『死に際、どないしたらええやろか—高齢化社会の断面をえぐる現場報告』 赤井成夫 青山館

1986年 1545円(税込)

長生きのツケをうまく払い、美しく老い、美しく死ぬる方法はないのか? お手本のない高齢化社会を生きる死に際の現場取材した異色レポート。ぼっくり寺参拝、老人専門病院、5人に1人が老人の町の風景などを取材。

『死ぬまで生きたい—シオンの国からメッセージ』

町田隆弘, 町田日出子 あすなろ社

1987年 1339円(税込)

都会の分刻みの生活から解放された内科医の夫妻が、神奈川県田舎に夫婦と動物たちだけの独立国シオンの国をつくった。ゆっくり暮そう、怠けようをモットーに。そして死ぬまで生きられる老人ホームの建設を夢みる。

〔た・な行〕

『死にゆく人々に教えられて』 亀山美知子 人文書院

1988年 1442円(税込)

危篤状態の父親に9日間付き添った体験を語り、その9日間は肉親の死を受容するのに必要な時間であったという。さまざまな死にゆくひとに学ぶ死生観と死の看取りについての珍しい本だ。

『たたかう老人たち』

重兼芳子 女子パウロ会

1986年 1339円(税込)

人間の抱えている問題の集約地である異色老人ホームをルポ。特に韓国のナザレ園、中途失明者が9割いる老人ホーム、炭坑、山谷、広島原爆養護ホームなどを訪ずれている。作家としての視点がひかる。

おんなの本・中国

(連載第3回)

『女十人談——

流動する現代女性世界の性愛観』

向 姪 著

秋 山 洋 子



1970年代にはじまった女性解放運動第二波の特徴のひとつは、女たちが性について率直に語りはじめたことだった。それまでは個人的なものとして閉ざされていた性の分野にフェミニズムの視点から光をあてることで、男女の支配・差別構造の分析はより深い地点に到達した。

ところで中国はこれまで、性に関しては完全にといってもいいほど閉ざされた国だった。儒教的な古い道徳観念に加えて、革命を担った中国共産党のビューリタニズムが、性的な表現をあらゆる文化芸術から追い払ってしまったのだ。

そんな中国に変化をもたらしたのが1980年代の経済開放政策。開放の影響は文化の面にも及び、映画には初めて熱烈抱擁シーンが登場、性を中心テーマとした張賢亮の小説『男の半分は女』(1985年)が評判になった。

ここで紹介する『女十人談』は、女性の著者が12人の女たちに性に関する体験を聞き、まとめた作品である。性に関する体験といっても、中国の状況が状況だから、性行為の具体的な描写や性心理の鋭い分析にまで筆が及んでいるわけではない。性を語るというよりは、性に関することもあえて避けて、自分の恋愛、結婚、婚外の愛、離婚などについて語った程度のものである。

それでもやはり、この試みは新鮮だし、登場する女たちは個性的で面白い。婚外の愛ひとつをとっても、夫の婚外の愛を認める妻がいるかと思うと、夫の心を失なっても結婚生活にしがみつき夫に他の女を寄せつけない妻もいる。妻子のいる男に恋をし、周囲から袋だたきになりながらも毅然として愛を貫く女はこう言う。「歴史の角度から見れば、道徳の標準は絶えず変

化しています。」「女にとって最大の苦痛は…体が心とやらはらに人に合法的に占有されていることです。」

中国で「第三者」と呼ばれる婚外の愛人は、道徳的に非難されるだけでなく、職場からも圧力をかけられ、党员である彼女は党の警告処分さえ受ける。それでも彼女がくじけないのは、形式だけの妻よりも自分の愛のほうが本物だと信じているからだ。

もうひとりの新しいタイプの女、売れっ子の映画監督は、自分は独身主義者だが禁欲主義ではないと公言する。性と愛とは別なものだと言いきる彼女は、現在の中国では一匹狼的な存在だろう。そんな彼女も、少女時代にはひとりの相手のために貞操を守り、結婚したら一生その相手につくすものと考えていた。初めて体を許した男に捨てられ、結婚した相手からは処女でなかったことを理由に殴られ、三年間に四回の中絶をするという体験を経て彼女の性愛に対する考えは変化した。しかし、自由な女である彼女を愛人として喜ぶ男は、一方では妻が結婚した時は処女だったと自慢気に話すのだ。

12人それぞれの生き方を自分の口から語らせることによって、著者は封建性が根強く残っている中国の社会風土と、その中から新しく芽生えようとするものを的確に描き出している。著者はあくまで控え目に、聞き手に徹しているが、語り手との間の信頼関係、細かい目配りが随所に感じられる。

著者は前文でこう述べる。「ヒロインたちの真実で、複雑で、ひいては互いに矛盾する性愛の経歴は、女性がさらに自分を理解し、男性がさらに女性を理解し、ひいてはさらに時代を理解することを助けるだろう。」

『女十人談——中国紀実文学集』所収 文物編

中国社会科学出版社 1988年 北京

『長寿が文化を変えるとき—エイジレス・ライフのすすめ』 新しい中高年の生活文化を考える懇談会編 ぎょうせい 1988年 1236円(税込)
中高年の生活文化の現状、崩壊した伝統的な老人生活パターン、「豊かな好老社会」創生論、向老準備期間としての中年期の生き方など各界の識者が多数派となりつつある中高年の個性ある生き方のすすめる(樋口恵子、堺屋太一、高原須美子他)。

『終の棲み家—呆けを生きる』 津山千恵 評伝社 1985年 1339円(税込)
特別養護老人ホームと広島老人呆けの人を支える会などを取材し、高齢化社会の最前線の実態を鋭くとらえたルポ。

『妻からの贈り物』 石川弘義 海竜社 1986年 1133円(税込)
家族でニューヨークに滞在中に、妻が急死。後に残された夫と息子のグリーフワーク(悲しみの消化作業)が社会心理学者の眼を通して語られる。そして中年からの再婚へとすすんだ。

『妻と夫の実年時代①』 NHK 編 日本放送出版協会 1989年10月 670円(税込)
人生80年時代を生きる新しい夫婦像。同タイトルの番組の出版化。

『入居者にみた有料老人ホーム—選び方、住み方』 福島善之助 ミネルヴァ書房 1989年6月 1400円(税込)
有料老人ホームに住んで9年。利用者の立場から高齢社会の住み家としての有料老人ホームを徹底的に調べたガイドブック。

『ニューシルバ—の誕生—高齢化社会とシルバービジネス』 菅原真理子 東洋経済新報社 1989年3月 1700円(税込)
5人に1人は65歳以上の時代を迎えるニュー・シルバ—の出現。高齢者の自立とシルバービジネス、シルバーマーケットを考察。

『年金の本』 川村匡由他著 婦人画報社 1988年 1545円(税込)
40歳になったら年金(老後)が気になります。公的年金、個人年金について誰もが感じている年金についての疑問点に答える。

〔は行〕

『働きながら親を見る—女の自立と老人介護』 沖藤典子 学陽書房 1984年 1236円(税込)
働くことと親の介護を両立させる道を探る。著者の苦い経験からの発想に説得力がある。

『伴侶の死』 加藤恭子 春秋社 1989年 1747円(税込)
38年連れ添った夫がガンで急逝。家庭の中の夫以外の夫像を求めて残された妻が夫と親交のあった人々を尋ね歩く。

『夫婦—人生の長い午後』 清野博子 ミネルヴァ書房 1983年 1339円(税込)
中年から老年にかけのさまざまな夫婦を追いつづけて、人生80年時代の人生の午後を生きる夫婦のあり方を考える。

『変装—私は3年間老人だった』 ベット・ムーア 木村治美訳 朝日出版社 1988年 1236円(税込)
3年間、実際老人の一人に変装して暮らした有能な若い工業デザイナーの話。「自分の未来に旅」した一人の女性の体験レポート。ほとんどの若者たちは自分のことで忙しく、老人のことを知ろうとしなかったという。

〔や・ら・わ行〕

『安くはいれる有料老人ホーム』 わいふ編集部編 ミネルヴァ書房 1987年 1442円(税込)
全国72カ所の有料老人ホームにアンケート調査した資料をもとに情報を公開。子どもに依存せず最後まで自分の人生を生き抜くためにも老人ホームの生活はもっと重要視されてもいいはずだ。

『夕映えのときを美しく—特養老人ホーム・丹波高原荘の人びと』 吉村久美子 新日本出版社 1989年 1000円(税込)

「人生の秋にいる人たちの、その秋をどれだけ黄金色に輝かせるか、それが自分たちの仕事だ」との考えから府会議員時代から寝たきりの25年の老親をかかえて苦勞した著者がこの老人ホーム園長の経験を語る。

『嫁姑—老年「女の気持」30年①』 毎日新聞社大阪本社学芸部編 新評論 1987年 1236円(税込)
新聞の投書欄にみる老後、老人との関係、身辺雑記。

『ルポ 老人病棟』 大熊一夫 朝日新聞社 1988年 1236円(税込)

『週刊朝日』に連載され反響を呼んだルポ。病院の内容をチェックする法を教えます—老人専門病院機能評価表を掲載。神奈川県内の標準的な老人病院に取材し老人病棟の実態をルポ。ベットに縛りつけられる老人、点滴して延命策、微熱に抗生物質等、福祉後進国・ニッポンの貧しい老人病棟。“あとがき”のコメントのように、「お嫁さん」を当てにした日本型福祉にノーをつきつけ、しかるべき社会保障のシステムをつくるべきときがきている。

『老後の本』 川村匡由 婦人画報社 1988年 1545円(税込)
健康、お金、伴侶、生きがい何でも解る老後100問100答。再就職に役立つ資格リスト、全国シルバー人材センター一覧等。

『老婚ばんざい—六十おんな奮闘記』 福永隆子 ミネルヴァ書房 1989年9月 1600円(税込)
「フン、あの年で再婚するなんて、あきれたわ。女の自立とかなんとかカッコウ言いこと言っておきながら」という声が聞こえた。自立した女性は独身であるべきというのは、おかし。結婚はなにも男の身の周りの世話をするという従属関係ではないのだから。老いの性のタブーを打ち破った老婚。新老世代の自立の志のある、これからの老後設計に役立つ本。

『老年学事典』 那須宗一監修 一番ヶ瀬康子他編
ミネルヴァ書房 1989年3月 8755円(税込)
老年学は高齢化がすすむにつれて一層大切な研究分野となってきた。本書は老年叢書(OP叢書)など、数多くの老後問題の本を出版しているミネルヴァ書房が老年学の粋を集めた読む事典。老化の基本科学/ヒトの老化/老年期の心理/老年期の看護・リハビリ他。

『老年期の性』 大工原秀子 ミネルヴァ書房
1979年 1339円(税込)
老人についての偏見で最も根深いのは老人の「性」についてではなからうか。老人にも性欲は当然ある。老人の性についてわが国で書かれた最初の本。

『老人と生きる食事づくり』 老人給食協会〈ふきのとう〉編 晶文社
1989年6月 1580円(税込)
自分の手で自分の老後を準備していかなければならない。〈ふきのとう〉の活動は自分の老後にかけている社会活動。地域で老人給食の宅配の活動をつづける主婦グループの記録。

『ローバは一日にして成らず』 樋口恵子 文化出版局
1989年9月 1200円(税込)
①いい男、家事と仕事を両立し、②ローバは一日にして成らず、③ハカなき人生、女が変わる……。人生80年いろはがるた。軽妙な人生論。

『私の老い構え—元気に老いる女の16章』 樋口恵子
文化出版局 1987年 1100円(税込)
「ああ、ショック。オイルショックを上回る老いるショック。老いに向かうとはこういうことなのか」ではじまる老い構えを書いた本。「動物でさえ子どもが成長すれば、親子は独立して生きていきます。人間だけがいつまでも子どもの自由を束縛するとしたら、申しわけないことではありませんか」と日系老人ホームの日系人。「孫を持つ嫁」などという日本の家族の歴史始まって以来の高齢化社会に立ち向かう知恵の数々。大きな活字で読みやすい。

『わたしの在宅看護事典』 後藤栄子 三省堂
1987年 1030円(税込)
老人看護事典。50音順の200項目からなる図解入り。

『わたしの姑支度』 吉武輝子 海竜社
1986年 1133円(税込)
著者の一人娘あずさちゃんに将来を約束する男性があらわれた。著者は彼の母親と女同士仲よくやっていたと決意し早い目に姑支度を始める。女が女の足をひっぱるという長年の歴史に終止符をうちたいという。よき男性とめぐりあいあらたな人生の旅立ちをひかえた子をもつ母親へ贈りたい本。

〔雑誌・資料〕

法学セミナー増刊43「いま問う、男の老い」日本評論社
1989年9月 1250円(税込)
「男性問題」の究極の弱点(利点?)——老いにとりくんだ意欲的な企画。男の老いを問い直す・樋口恵子/日本の男はなぜ急速に「オジサン」化するのか・福島瑞穂/マス・メディアは老いをどう扱っているか/老いの国際比較/ブックガイド・男の老いと向きあうために他。

岩波ブックレット70「有料老人ホームどこが居よいか住みよいか」 樋口恵子 袖井孝子 岩波書店
1986年 257円(税込)

老親ケア—親の面倒をみるときの参考書
日経ホーム出版社 1989年9月 800円(税込)
ほとんどのひとは「親の面倒見はいつか来るもの」と覚悟しているものの、「嫁だから」「子だから」の無前提の押しつけにも反発を感じる。本書は「35歳から」と銘打ったのは親が元気なうちに親と自然なコミュニケーションを持っておくことが大切だからという。親ケアの体験者と専門家のアドバイスを満載。介護、マネープラン、心身のケア他。

ミニ・レター

「本」との出会いには、「人」と同じく、「時期」があると思うんだけど、これ『からだ・私たち自身』すごく元気がでた!

出産・育児に関してアメリカ女性達の声。これが一番なのです。彼女らの百人百様の経験と感想を知ることが。

本が着く前の日、「6か月たって少し人間らしい気分になったわい……」と思ったところ。当日は読み耽ってしまっただけ10時間もオムツ替えを忘れてた……。

序文の「肉体はこの世にあるための物理的基地」っていう(当たり前の)言葉にひどく感銘をうけたりして。「他の女性との連帯」という意識も初めて納得いったし。

この本って、存在自体が爆弾だね。

(木村和子さんから友人への手紙)

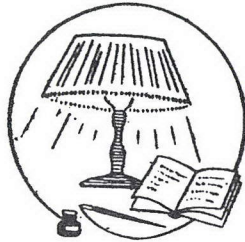
私は、この夏二週間程、ニューヨークを中心にアメリカに滞在しました。旅の目的のひとつが、フェミニズムと科学に関する本を捜すことだったので、出発前にニューヨークのウイメンズブックストアについてご紹介頂くよう、松香堂の方に電話でお願い致しました。後日、ご丁寧にも所在地等のリストのコピーを送っていただきました。リストにはニューヨークの書店が二軒あり、そのうちの二軒の“Womanbooks”はかなりの在庫数を誇っているということだったので、所在地を訪ねてみました。ところがそこはマンガ専門店になっていて、店の人にたずねたところ、Womanbooks はかなり前につぶれてしまったということでした。ニューヨークでもこのような店を維持するのはむずかしいようです。

息長く、しかも質を決して落とさず、このような活動を続けていくのは大変だと思いますが、今後どうぞがんばって下さい。ウイメンズブックスの存在に勇気づけられている人々は、私も含め、少なくないと思いますから。

(松原洋子さんから松香堂への手紙より)

—女性のための—

最新刊案内



—1989年8月～
1989年10月及び
第32号未掲載分—

〔性・からだ・心理〕

『Yes, But...フェミニズム心理学をめざして』

ジーン・ペーカー・ミラー 河野貴代美 監訳
新宿書房 1989年9月 2472円(税込)

「そうかもしれない、でも…」このようなことをお互いに言い続ける再考のプロセス、それぞれ個別な生き方と分かちあい。いままで女性のマイナス面として捉えられてきた属性をプラスに変えていく11カ国で翻訳されたフェミニスト心理学の好著。巻末に対談 本書の評価と日本におけるフェミニズム心理学への展望——加藤春恵子、河野貴代美。

『性はおおらかに—山宣の性教育に学ぶ』 小田切明徳

かがわ出版 1989年7月 1030円(税込)
日本の「性教育のババ」というべき先駆者、山本宣治に学びながら性とは何か、わが性の処し方、子どもとの対応の仕方などを中心に性を語る。著者は中学校の理科の教師。体験的性教育論、「ベットの中の民主教育」「避妊は男の役目」他。

〔女性史・評伝〕

『家族と女性の歴史 古代・中世』

前近代女性史研究会編 吉川弘文館
1989年8月 6500円(税込)
同研究会の10周年を記念して世に問う論文集。家族・婚姻と女性、共同体と女性、家と女性。

『女の中世』 細川涼一 日本エディタースクール出版部

1989年8月 2500円(税込)
日本の中世は家父長制が確立し、女性は「家」に帰属していった中で、女武者、巴や小野小町、尼衆などの単身者に焦点をあてた中世の女性像。

『昭和遊女考』 竹内智恵子 未来社

1989年7月 2575円(税込)
廓で身を売る女子も哀れ。廓の娘で育った故に、後指さされる娘も哀れ。「素人の女房らはわれらを売女と罵るが、女郎とて人間のハンクレ、こころまでは銭では売らぬ、売る物がもうなあんにもない私ら、最後に残るわたいの宝、最後の心だけは銭じゃ売らぬ」、東北の都に栄えた遊廓の苦界に生きた五人の元遊女の聞き書き。切々と心にしみる哀切の記録だ。

『尼と尼寺—女性と仏教』 西口順子 大隅和雄編
平凡社 1989年8月 2730円(税込)
女性と仏教シリーズ① 女性と仏教をテーマとする場合、「尼と尼寺」はその研究対象として主要な課題である。光明子の仏教信仰、平安時代初頭の仏教と女性、中世の尼寺と尼他。

『まんが 市川房枝物語』 森 哲郎 解説・江刺昭子
明石書店 1989年9月 1200円(税込)
解説、年譜つき評伝まんが。若い世代に贈る新しい試み。

〔女性論・フェミニズム〕

『シングル・マインド—ニューヨークの女たちはいま』
多賀幹子 学陽書房 1989年9月 1300円(税込)
日本でもセクシュアル・ハラスメントが「問題」化してきた。本書はアメリカの女性たちはどうそれと闘ってきたか、事例を報告しつつ問題解決への道を探る。またニューヨークのワーキングウーマンたちのシングル感覚、エイズのおよぼした深刻な影響などにも言及。最新のニューヨーク報告。

『アメリカン・マガジンの女たち』 常盤新平 大和書房
1989年10月 1340円(税込)
アメリカの良き時代を彩った女性ジャーナリストたちをアメリカ大好きな翻訳家が語る。ヴォーグ、コスモポリタン、マッコールズ、ミズ、セブンティーンなどの魅力ある編集者たち。女性ジャーナリストたちは「アメリカを下から見上げる」という。

『いま女の権利は—女権先進国フランスとの比較から』
林 瑞枝編著 学陽書房 1989年7月 1900円(税込)
フランス女性たちの自立200年の歩みを主に制度を中心に再検討を試みた本。性の自立、公務員法制、自立を支える社会保障他。

『セクシュアル ハラスメント—女たちの告発』
宮 淑子 教育史料出版会
1989年11月 1339円(税込)
セクシュアル・ハラスメントは20年余りに米国のフェミニズム運動によって生まれた新語。これは「労働災害」でもあるという。本書は福岡損害賠償請求事件、西船橋駅転落事件などに取材した女ゆえに受ける不当な性的いやがらせにNONをつきつける緊急出版。

『スカートの下の劇場』 上野千鶴子 河出書房新社
1989年9月 1300円(税込)
『セクシーギャルの大研究』に始まる著者のセックス路線の第三弾か? 図版を見て買う男性が多いらしい。

『発言する女たち 地球の再生』
レオニー・カルディコット+ステファニー・ルランド
奥田暁子 鈴木みどり共訳 三一書房
1989年10月 1600円(税込)
フェミニストは性にかかわる問題だけではなく、地球上のすべての生命をみな殺しにする家父長制と闘おう。フェミニズムの「ニューウェーブ」、地球再生のビジョンを共有するフェミニストの発言集。

『ポストモダン・フェミニズム—差異と女性』金井淑子
勁草書房 1989年8月 2060円(税込)
原著『転機に立つフェミニズム』以後の論稿。平等・自立論から差異・自律論へ。

『女性雑誌を解説する』井上輝子+女性雑誌研究会
垣内出版 1989年9月 2884円(税込)
この秋も女性誌の創刊が相次いでいるが、本書は日・米・メキシコの女性誌の比較研究の力作。女性雑誌の役割を性役割の流動化と再編成、文化的帝国主義の浸透と分析。'70年代以後の雑誌分析、広告メディアとしての雑誌、女性雑誌のことば、コスモポリタンの男性獲得法。

『あるフェミニストの告白』ナワル・エル・サーダウィ
鳥居千代香訳 未来社 1989年7月 1236円(税込)
結婚制度も家族法もいまだに夫に有利なエジプト。エジプトで女性の権利を求める闘いをつづけている医師であり、作家であるサーダウィの初めての作品。私は女の子！男性の体、結婚そして別れ他。

『罪もなく、自由もなく—ジニー・フォート物語』
ジニー・フォート+ローラ・フォアマン
翻訳工房「とも」訳 新水社
1989年7月 1650円(税込)
全米女性機構の委員だったジニーは夫によって殺人罪で告訴され、反フェミニストに絶好の攻撃チャンスを与えた事件で、無実の罪から解放されるまでの闘いの半生記。

『私は私』ユーディット・ヤンベルク著
エリザベート・デザイ企画協力 批評社
1989年10月 2060円(税込)
西ドイツの一女性の個人史。「私が耐えてきたと同じ結婚生活の基本パターンを実に多くの女たちが生きている」。個人史的なこの本が客観的な本となっていることを裏書きしている。結婚、出産、中絶、夫の暴力、「私」自身であろうとして離婚のプロセスを経て旅立った自分史。

〔家族・パートナー・子ども〕

『サボテン家族論』宮迫千鶴 河出書房新社
1989年9月 1700円(税込)
「私はこれまでの日本の家族の多くがそうであったような、ジメジメ湿気の高い人間関係は苦手である」という画家の宮迫さん。この「サボテン」とはカラッとした人間関係を構成する「明るいひとり」をイメージするタイトルだ。男と女が対等な関係を保ち、たがいの個を尊重し、経済と家事、育児の責任を分担しあう伸びやかな結婚—両性自立的結婚を語る。夫婦のよいコンビネーションはいきることを豊饒にしてくれるという。シングル・ブームの昨今、本書には良きカップルカルチャーの楽しさが一杯つまっている。

『スクランブル家族』吉廣紀代子 三省堂
1989年10月 1500円(税込)
超高齢化社会に向けて開かれた15「家族」のレポート。血縁家族幻想=父系家族からの解放、家族再編へのチャレンジ。血縁の有無を問わず、一緒に暮らす「家族」を「家族」とよぶ。

『非婚と結婚—さまざまな生の選択』星野澄子
青木書店 1989年8月 1545円(税込)
『夫婦別姓時代』(青木書店)の著者の第二弾。性的自由・自立と婚姻制度、お墓と夫婦別姓、老人と家族他。

『結婚の午後—シリーズ・いまを生きる②』ユック舎
1989年10月 1030円(税込)
女と男がともに生きる関係を考える。近ごろの結婚できない男について(村田 基)、結婚のメリット・ディメリット(福島瑞穂)、インタビュー 漱石の結婚(駒尺喜美)他。

『離婚・再婚と子ども』椎名麻沙枝、椎名規子
大月書店 1989年8月 1400円(税込)
アメリカでは離婚した人の四人に三人は再婚しているといわれる。しかし「結婚好き」な国民である日本人も、再婚とりわけ女性の再婚となるとその比率は低くなる。本書は弁護士と研究者の姉妹が離婚・再婚をめぐる諸問題を考える。子が親の離婚をのりこえるための配慮/親権者について/子に対する経済的保障/再婚と子ども/高齢再婚/内縁の現代的意味。

『家族とは』細見三英子 フォー・ニュー
1989年4月 1340円(税込)
登校拒否の息子を抱えて—家族再建/家庭を知らない女性が作った家族—新家族/男にとって家族とは—単身赴任/元ソープランド嬢の自立記—女たち/家族の原点を求めた新聞記者のレポート。

『三世同居—幸福な同居は可能か』鈴木由美子+グループわいふ、有斐閣
1989年10月 1442円(税込)
三世同居は社会の荒廃現象に対する特効薬であるかのように喧伝される。同居幻想に頼っては危険だ。いままな同居なのか、アンケートの語る現実、「嫁」「姑」たちは語る、対談三世同居の未来、同居の法律Q&A他。日本的「同居」の問題点を問う好著。

『母親モラトリアムの時代』蘭 香代子 北大路書房
1989年9月 2200円(税込)
臨床心理士が母親モラトリアムの時代に Co-セルフ(コ・セルフ)—拡大された自己を獲得するのが「母親になる」ことと考えたらどうだろうか、という。母親像の変遷と母親の現状、妊娠・出産によって形づくられる母親の心理、育児期の心理などから「母親の意味」を検討したもの。

『男も変わり目』藤原房子 日本経済新聞社
1989年8月 1100円(税込)
男たち、どうする—いま女性からの男性変革に期待する声が高まっている。こうした時代の大波小波に、男たちも少しずつではあるが変わり始めている。「男は変わり目」とのタイトルがいうように、自ら望んで、あるいは面白がって自然体で変わっていく男性の実例が本書にたくさん登場する。

『男と女で「半分こ」イズム—主夫でもなく、主婦でもなく』育時連(男も女も育児時間を！連絡会)編
学陽書房 1989年10月 1230円(税込)
育時連の活動の10年目の出版。関西にもこのグループができています。「本当に男女平等を実現するには仕事も家事・育児も男女半分こ」を主張。黒田あゆみ、落合恵美子さんなど外野席の意見も満載。たのしい本である。

『男という好奇心』海老坂 武 筑摩書房
1989年9月 1230円(税込)
上野千鶴子氏の『女という快楽』のコピーだというこの本のタイトル。著者の好奇心いっぱい視点で女性について書かれたエッセイ、女学者/化粧考/コルドン・ブルー他、日常生活ウォッチング/男の手料理/映画評など「女好き」を自称する海老坂氏の新コラム集。

〔労働・経済・法〕

『楽しくやろう夫婦別姓』

福島瑞穂, 榊原富士子, 福沢恵子 明石書店
1989年9月 1600円(税込)

別姓は良きパートナーにめぐりあえるメルクマー。フウの女性も姓を大切にしたい時代。別姓は一部のキャリアウーマンのものではない。法学者のあいだでは別姓賛成派が主流。夫婦別姓チャートによるあなたの適正別姓実践講座——「正当派別姓」は事実婚です。法律結婚——通称別姓。座談会「一度食べたらやめられないおいしい別姓の話」。

ピースネットブック②「夫婦別姓はいかが」

福島瑞穂 ピースネット企画 1989年8月 500円
夫婦別姓のためのハンディなガイドブック。対談, Q & A 基礎編——その歴史と外国の実態。Q & A 応用編——どうやって実現するの？

『山の動く日—土井たか子政論集』 すずさわ書店
1989年10月 1545円(税込)

社会党委員長就任以来, 3年間に内外で行った主要な演説, 講座を収録。モスクワ大学での「ヒロンマとチェルノブイリを忘れずに」, 女性たちとの集会で「女性が変われば政治が変わる」他。

『女の再就職』 原田静枝 学陽書房
1989年4月 1180円

専業主婦から抜け出したいと悩む女性, ハードルを越えて働き始めた女性, ずっと働き続けた女性など, 500人をこえる女性たちの体験をもとにレポートした再就職の最新情報。再就職をめざす女性の意識調査によると「生きがいを求めて」というのが多い。どんな仕事でも働く第一の目的は経済的自立であることを忘れないで, という。

日経ウーマン 別冊「働く女性の情報カタログ・はつらつ転職(再就職)ブック」 日経ホーム出版
1989年10月 580円(税込)

あなたの頼りになる助っ人・情報ファイル1300件/今, すぐ仕事に役立つ20の資格と技能/人材派遣会社はこの手で活用。

〔ノンフィクション・エッセイ〕

『フィリッピンを愛した男たち』久田 恵 文芸春秋
1989年10月 1500円(税込)

いままでフィリッピン女性と日本男性の結婚は農村部に多かった。現実にはいま大都市にそのカップルが急増している。

『時に聴く 反骨対談』井住すゑ 寿岳文章 人文書院
1989年9月 1380円(税込)

西と東の両知性と時代の生き証人のBig対談。差別について, 天皇制について, 未来への提言, 生命を守る他。

『<人間>を超えて—移動と着地』

上野千鶴子 中村雄二郎 青土社
1989年10月 1700円(税込)

「現代思想」に連載された往復書簡。老いのセクシュアリティ, 子どもの時間, 時代の気分は老人性, 哲学的還暦などをテーマに還暦の中村氏と不惑の上野氏の交流。

『性分でんねん』

田辺聖子 筑摩書房

1989年9月 1230円(税込)

この日本にはヤングと老人ばかりのようだ。オトナはどこへ行ってしまったのか? オトナの成熟度を感じさせられる政治家が何人いるだろう? オトナ時代, 女族の反乱, 年下の男との愛と結婚等の最新エッセイ。

『アリスの穴の中で』

上野 瞭 新潮社

1989年8月 1400円(税込)

小説『砂の上のロビンソン』などで知られる作家・上野瞭氏が男性の妊娠というレトリックを使って人生の入口の問題と, いま, 老人病院に入院中のおば, サキに人生の出口を語らせ, 「男も妊娠すればいいのじゃ」というサキの怨念と, グロテスクな男の妊娠中の描写を通して作者は何が良かったのか? 性と生を考える問題作。本号書評をご参照下さい。

『描かれた女性たち AMERICAN WIVES』

マーガレット・アトウッド, アン・ビーティ他
スイッチコーポレーション発行 扶桑社発売

1989年6月 1600円(税込)

米国現代女性作家の短編小説集。親子, 夫婦, 恋人などの新しい人間関係を模索する10人の作家たち。急流を下る/マーガレット・アトウッド, アン・ビーティ, マリアン・サム他。

『桑港ホテル物語』

平田順子 ダイアモンド社

1989年6月 1240円(税込)

離婚し再渡米で M.B.A.(経済学修士) を獲得。サンフランシスコのホテル・マネージャー。ビジネス英語を並記した文章。女ひとりのビジネス・アドベンチャー物語。

〔雑誌・資料〕

法学セミナー増刊43「いま問う, 男の老い」日本評論社
1989年9月 1250円(税込)

本号特集目録5頁に既出。

『老親ケア—親の面倒をみるときの参考書』

日経ホーム出版 1989年9月 800円(税込)

本号特集目録5頁に既出。

現代思想 9月号「特集 セックスの政治学—男のフェミニズム」 青土社 1989年9月 980円(税込)

メンズ・リブが必要だ——上野千鶴子 ヴァージニア・ウルフなんかこわくない——T・モイ 男のフェミニズム——S・ヒース他。

季刊 フェミナ 創刊3号「特集 日本の名流名短編」
学習研究社 1989年10月 980円(税込)

岡本かの子, 田村俊子, 円地文子他。

かものがわブックレット 19「草子のことば教室」

寿岳章子 かものがわ出版 1989年8月 350円(税込)
ことばの世界のあれこれを話題風に面白く語ることばブックレット。「婦人」か「女性」か, 「主人」と「つれあい」, 心惹かれることば, 気になることば。

婦人白書 1989「生涯学習」と日本の婦人」

日本婦人団体連合会編 ほんぶ出版
1989年9月 2270円(税込)

「生涯教育」と婦人, 海外における婦人の生涯学習(アメリカ, イギリス, フランス, 東ドイツ)。臨教審によって打ち出された「生涯学習体系への移行」は高齢化社会の担い手づくりが大きな柱になっているのでは, との疑問点がある。

月刊 女性情報

バド・ウイメンズオフィス 各2060円(税込)

8月 選挙と女性 PART 3

9月 性の商品化とセクシュアル・ハラスメント

10月 高齢化社会 女がメディアをつくる

『女性のための留学ハンドブック』

国際文化教育センター編著 JICC 出版局

1989年10月 390円(税込)

キャリア・アップを担う女性の海外留学が相次いでいる。

留学方法と準備, 帰国後の再就職, 巻末にはアメリカ,

イギリスのコミュニティカレッジ, 語学学校, 大学の英語

集中コースの一覧もある。

『オバさんの留学』

田中まりい 朝日出版社

1989年9月 1200円(税込)

「不惑」を迎えた主婦がロンドンへ短期留学。悩めるオ

バさんはいかにして留学を決意したか。オバさんは根性

でダンナを口説いた。オバさんのピカピカ一年生他。

『婦人労働の実情 '89年度版』

労働省婦人局編

大蔵省印刷局 1989年11月 1030円(税込)

『JAPAN Through the Eyes of Women Migrant Workers』

HELP Aisna Women's Shelter

1989年7月 1000円

『ヘルプからみた日本』の英語版。

『復刻 新吉原保健組合機関紙「婦人新風」』

解説・深江誠子 明石書店

1989年9月 20600円(税込)

1952年から1957年まで発行された, いわゆる「赤線」に働く売春婦の日常生活から「売春防止法」にいたるまでの組合の活動報告などの記事, 売春婦たちの詩, 小説, 紙上相談等。戦後民衆史として貴重な資料。

『国立婦人教育会館「女性学講座」報告集一性役割の固定化・流動化(S58~S60年)』

企画・編集 国立婦人教育会館 第一法規

1989年6月 4635円(税込)

女性学年報 第10号

日本女性学研究会女性学年報委員会

1989年10月 2000円

1980年に創刊された同誌はプロとアマの区別なく女性学に関心のあるものに開かれた研究誌。10周年記念号の10号は日本の女性学, 世界の女性学, エッセイ, 研究ノートなど多彩。上野千鶴子, 落合恵美子, 秋山洋子, 善積京子他多数の執筆陣。本号「あなたの情報・私の情報」をご参照下さい。

わたしの出会った本

藤田 久美

『メディア・セックス』

ウィルソン・ブライアン・キイ著

植島 啓司 訳 リポート (1854円 税込)



この本は「アメリカのメディアがサブリミナル(潜在意識)操作を通じて, すべてのものをセックス化している状況」について書かれている。脳の無意識な部分は, 写真や目の不協和音的な要素に, 非常に敏感であるらしい。その無意識な部分へ働きかけるのが, サブリミナル効果なのである。

巻頭数ページに, テレビのCM・PLAY BOYの表紙などが例示されており, そのどれもが, 私達が日常目に見ているようなありふれたものなのだが, 拡大図を見ると, 子供の足やクラッカーに, 「SEX」という文字が描きこまれていたりするのは驚いてしまった。解説を読んでまたまたビックリ。何の変哲もないようにみえる女性の写真が, 実は男性がボーイッシュな女性に変装した写真であったりと, サブリミナル効果をねらった, 複雑なからくりがあるのだ。

本文中では, メディアによって性的オブジェのファンタジーがインプリントされてしまい, そのイリュージョンが現実よりリアルになってしまう。女性を性的オブジェとして取り扱うことを幼い頃から訓練される。そこでは, 女性と人間的な関係をもつことは困難になり, 性的コミュニケーションは男性の攻撃的で残酷なものになる。子供の性的オブジェ化はもっとも恐れられているタブーであるから, 効果的なサブリミナルテーマとなりうる, などが詳しく述べられている。

今, ボルノや広告ポスターなどをめぐってフェミニスト達からの抗議の声があがりだしているが, それに対して「表現の自由」の名のもとに, 反対派攻撃が(多くは男性から)起こってきている。しかし, 考えてみて欲しい。私達が「表現の自由」をも含む, 性的自由を求めるためにたたかうのであるなら, 本書にみられるようなメディアを媒介とした性表現は, プラスなのかマイナスなのか。メディアを通して私達の性意識は主体性を失い, 自在に操作されているだけではないのか。そこにあらわれてくる「性的歪み」に対して, 女達は「No」と言っているのだということを, 男性に理解してもらうためにも, 役立つ本ではないかと思った。

(司書)

《あなたの情報・私の情報》

一日・米・メキシコ3国の女性誌を比較—
 新刊「女性雑誌を解説する」をおすすめします。
 (垣内出版)

村井 恵子

3年前の9月に京都で催された合宿とシンポジウム「女性雑誌ジャーナリズム」(日本女性学研究会・女性雑誌分科会主催)にはるばる東京から来京され、いくつかの貴重な研究発表をしていただいた井上輝子と光大学教授ほか女性雑誌研究会の皆さんが、この秋8年間の研究成果をまとめて一冊の本にされました。発刊の報をとってもられしく思っています。

おびただしい女性雑誌の変わらぬワンパターンぶりには、私達も「どうしてみな似たりよったりなのだろう」「ますます広告ばかりだね」と日頃疑問や不可思議さを抱いているわけですが、これを漫然とした疑問に終わらせず、膨大な量の雑誌の紙面を分析され、数量データに整理、統括されたことは、貴重な功績だと思います。

雑誌表現の中の流動化しているようにみえてその実再編成されている部分も多い性役割分担意識への問題提起と、現在一段と進んでいるメディアの商業化への警告が、本書全体の基調テーマとなっていますが、現代アメリカのメジャー女性誌の中の瘦身・整形広告の量と実態など、さまざまな角度からの切り口がフレッシュで、80年代末の女性たちを取り巻く時代の動向についていろいろ考えさせられます。巻末の座談会も生の声が伝わって興味深いです。(2884円 税込)

『三岸節子 修羅の花』(講談社)を出しました。

林 寛子

不勉強で、フェミニストの正確な定義を知らない。けれども「私はフェミニストです」と言ってしまう。この本は“私のフェミニズム”の最初の本である。

新聞記者という仕事を通じて、一人の女性に会った。女性は、ふだんはフランスに住む高齢の画家だった。

おおきくて、豊かな女性について知りたいと思っていた。おまけに優等生嫌だった(これは危険な偏見であるが)。彼女は、自分のいた美術学校をこきおろし「不良少女だった」とどこかの新聞に書いていた。痛快な文章だった。反抗心に満ちていた。おまけに3人の子を抱えた未亡人であるということと、ガチガチの男性社会であった洋画壇にパイオニアとして切りこんでいくという二つの屈辱にまみれ、それらを踏みしだいて乗り越えてきていた。話しを聞きたいと思った。

三岸節子さんにインタビューしてまとめたのがこの本。若いころの攻撃性のようなものは年経てからの口吻から抜け落ちるのが常だが、明治、大正、昭和とああいふ時代があってこういう女性が生きていたのかと感ぜてもらえたら嬉しい。(1200円 税込)

(中日新聞記者)

リブによる「リブ15年の総括」(滝川マリ)
 を掲載した、京都とおからじ舎編
 『あさってに虹を駆ける』ぜひ一読を!

井上 はねこ

金井淑子さんの最新著作『ポストモダン・フェミニズム』を読み解く一つのカギともなる滝川ろんぶんですが、私たち「とおからじ舎」が解散しているため、探しあぐねておられた方も多いのでは、と思います。幸か不幸か、まだ在庫があります。滝川ろんぶんはもとより、私たちが「生きた化石」とからかわれながらもなお捨てきれなかったりぶとしての熱いおもいがびっしり詰まった一冊です。あの時代を知らず、マスメディアを通して語られる偏ったリブ(ex. 中ビ連)に違和感を抱いている若い人々には、とりわけお勧め!今が手にするラスト・チャンスです!

価格:1,500円(税込み)

連絡先:大阪市城東区森之宮2-7-1415

井上はねこ Tel 06-962-5441

ヤング情報誌「YAP」を創刊しました。

スラング“YAP”の意味は、べちゃくちゃしゃべる、くだらないことをしゃべる、文句を言う、抗議する……。そんな“YAPPING”の中から生まれてきた、若いオンナたちのミニコミです。

個性派志向、自然派志向の「私は私」がハヤっている世の中で、じゃあその“私”ってなんだろう?。この疑問から、縦横無尽のおしゃべりを続けてはや1年。恋愛、SEX、学校、社会、好きな音楽やコミック……。自分たちなりの表現で、いろんな形のいろんなつぶつぶを持った“私”をまずは伝えたくて、8月末に創刊号(¥150)を刊行しました。

さらに12月中旬には、内容もボリュームアップした“YAP”第2号(¥400)が出ます。2号の主な内容は……。

「インタビュー-佳村萌(女優、ミュージシャン、画家)」
 「内田春菊ライヴレポート」「特集・気持ちいい恋愛してますか? アンケート報告」他、ぜひぜひ、ご一読を!

連絡先:東京都中野区大和町3-8-17

JAM OFFICE 内「YAP 編集部」

北村年子 Tel 03-310-3637

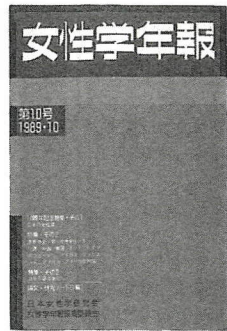
頒 価:400円 松香堂で扱っています。

事務局より

- ・89年会費未納の方は、振替用紙に金額が押印してあります。どうか年内にお納め願います。
- ・退会される方は必ずお申し出ください。(お断りのない場合は継続会員となります)
- ・転居・改名は、新旧両方ともお知らせください。

女性学年報10周年記念号が出ました！

女性学年報編集委員会 荻野美穂



日本の女性学界の秋の風物詩——とまではいきませんが、いまや女性学に関心を寄せる人々の間でわが国唯一の女性学専門の研究誌としてすっかり定評を得た『女性学年報』が、今年はめでたく創刊10周年を迎え、記念特大号を出しました。

1980年の創刊以来、各号の年報を支えてきたのは、女性学をやるのにプロもアマもない、女性の状況についての鮮烈な問題意識こそものを言うという初発の志でした。そして、これまで論文など書いたことのない人でも、言いたいことさえ持っていれば合評者とのやりとりを通して論文が書けてしまうというコメントーター方式、あるいは書きたい人が同時に編集委員や合評者もつとめてしまう「あいみだがい・持ち回り」編集方式を通して、これまでに多くのすぐれた論考、独創的な書き手、才能ある編集者が育っていったのです。

今号は記念号ということでき腕によりをかけ（？）、三大特集を設けました。〈特集1 日本の女性学〉では、上野千鶴子・落合恵美子・國信潤子の3人が、日本の女性と女性学の過去の歩みを鋭く分析しています。〈特集2 世界の女・男・女性学はいま〉では、秋山洋

子、藤枝滯子をはじめ11名の女たちが、中国からラテン・アメリカまで、広く世界の動きを概観します。〈特集3 自分を語る女たち〉

は、気負わずありのままの自分を表現しはじめた女たちの感動的エッセイ集です。

そして例年と同様、一般投稿の論文・研究ノートも、宗教集団「ひとのみち」から少女非行、女性作家、医療制度、離婚法、女性の男色嗜好等々、さまざまなテーマを取り扱った力作ぞろいです。その結果厚さは例年の1.5倍、さらに装丁も楽しく華やかに一新しました。このますます元気の『女性学年報』を、どうかあなたも一冊お求め下さい。

申込先：〒612 京都市伏見区向島ノ丸町151-58

1-1-905 高橋静子

Tel 075-601-8431

本体価格：2000円 送料実費

☆松香堂で取り扱っています。

★1990年版 女の手帳・カレンダー★

「スケジュールノートブック」 ジョジョ企画 1200円

毎週ページは女の本の紹介、巻末情報には女のグループやお店を満載、マスコミ会社リストもあります。

「J.O ダイアリー '89」 ミズ・データ・バンク 850円

付録・ミズデータノート 特集・こころとからだ 色=赤、青、ピンク、銀、黒

「銀幕の女性監督カレンダー」 ジョジョ企画 1500円

向後友恵「銀幕の女性監督」冊子付き

アリス・ギー、リアン・ギッシュ、ロイス・ウェバーなど無声映画の時代に活躍した女性監督が登場。クリスマスプレゼントに最適です！



フェミニストネットワークが会社になりました!!

ウイメンズブックスストア松香堂の日頃の活動の中から新しい会社(株)フェミニネット企画が生まれました。

女性学・女性問題の企画や、ポスターなどでさえもが男性の手で作られることが多い中で、女性たちの手に企画の主導権をとり戻したいという思いからの出発です。

フェミニネット企画は、女たちの能力を活かし、女たちのこころざしを、仕事にしています。

講師・アドバイザーなどのご紹介。講演会・講座・シンポジウム・イベント・展覧会などの企画。編集プロジェクト(企画・立案から印刷製本まで)ポスターなどのデザインから印刷まで。その他女性問題、女性に関する企画なら何でもご相談ください。ご用命をお待ちしています。

(株)フェミニネット企画代表 中西 豊子

TEL 075-414-2238 FAX 075-441-6905

世界中で翻訳 感動のミリオンセラー！

からだ・私たち自身

THE NEW OUR BODIES, OURSELVES 日本版

豊富な図版と写真、わかりやすい科学的知識、大勢の女たちの体験談、今すぐ役立つ国内の身近な情報大巾加筆

ボストン女の健康の本集団 著

監修 藤枝滯子 / 校閲 河野美代子・荻野美穂

「からだ・私たち自身」日本語版翻訳グループ

「からだ・私たち自身」日本語版編集グループ

- A4判・約600頁
- 定価：5,150円(税込)
- 定価：12,360円(税込) 図書館向特装本
- 送料1冊500円・2冊以上1冊毎に300円加算・10冊以上無料

WB 有限会社 松香堂書店

TEL075-441-6905



各方面で絶賛 早くも再版！

女も男も知っておきたい 女性のからだのすべてを解説

<健康でいるために・性・生殖・避妊・出産・老い・病気・女と医療の政治学 etc.>

いま問う、男の家事分担

「男性の家事分担に関する調査研究報告書」より

いっ かい み ね
一 海 美 根

(兵庫県家庭問題研究所主任研究員)



働く女性が増え、男性の家事分担を求める声が高まっている。'89年7月、兵庫県家庭問題研究所が行った兵庫県内の共働き夫婦626組を対象にした調査が発表された。同研究所の一海美根さんにその内容と一海さん自身の家事分担を報告してもらった。

「女」と名のつくものが、巷にあふれている。今年就職戦線では、史上初めて、大卒女子の内定者数が男子を上回ったそうだし、先の参院選の“マドンナ”作戦は言うに及ばない。

TVのニュースで「やっぱり、女性を活用してくれる会社だと思いました。」(某証券内定)と話す女子大生を見ながら、「簡単に騙されるんやなあ。」と夫が言う。確かに今は、空前の人手不足とあって、「女性の活用」を打ち出す企業は多い。だが、ちょっと待てよ、と思わなければならない。独身で、自宅通勤で、食事洗濯も親がかり、いくら残業したって帰ればお風呂が沸いている、っていう時はまだいい。「やる気」と体力さえあれば、何年かは頑張れるだろう。だが、結婚し、子どもを産んで育てながら、そういう生活が果たして続けられるだろうか。勿論、皆が皆、結婚して母親にまでなる必要はないのだが、たまたま、ものすごく好きな人ができて、気がついたら、子どもまでいた、ってことにならないとも限らないじゃないですか。

ここで、オカシイ、と気づかねばならない。果てしなく残業し、人生が仕事だけで回っているような生き方は、結局、食べることを、着ることを、住を整えることを誰かに依存しなければ成り立たない生き方だってことに、気づかねばならない。

私の家では、食事を私が作れば夫が片付ける。掃除、洗濯は手のあいたほうが、いつのまにかしている。1歳10カ月になる娘の、出産、授乳、おむつ替え、保育所の送り迎え、すべて2人でやってきたのに、何故か彼女は夫の方になついている。小さい子がいても、夫婦どちら

かが出かけても困らない関係は、とても自由だ。私たちは、意識して、こういう関係をつくってきたが、それは私自身、職業を持ち続けるためでもあったし、かけがえない子育て期を、夫にも堪能してもらうためでもあった。

だが、現実には、こういう関係は、まだ少ないのかもしれない。

昨年11月、兵庫県家庭問題研究所で、共働き夫婦626組を対象に、「男性の家事分担についての調査研究」を行った。その結果、身の回りのことはかなり自分でしているものの、男性が少しでもやっている家事は、「ゴミ捨て」(63%)、「部屋の掃除、片付け」(59%)、「ふろ掃除」(53%)が三巨頭で、「洗濯」は71%が、「夕食作り」は77%が「全くしない」と答えている。

男たちが家事をしない1つの原因は、時間のなさだ。この調査でも、その勤務時間の長さはすさまじい。夫と妻を比べると、妻は「8~9時間」(37%)、「9~10時間」(36%)なのに(これでも長い)、夫は「10~11時間」(25%)、「12時間以上」(22%)、「11~12時間」(20%)と、驚異的に長い。だから、家事をもっとしてほしい、という妻の要求に対して「物理的にできない」と答える夫が40%以上いる。

次の要因は、生活(家事)能力のなさだ。調査では、現在は家事、育児をかなりやっている男性14名へのインタビューも試みたが、幼い頃、生活自立の手ほどきを全く受けなかった男性は、学生時代の一人暮らしでカルチャーショックを受け、共働き結婚で、家事を覚える必要に迫られ、奮闘努力していた。

さらに大きな原因は、性別役割意識、そして、暮らしに対する認識の問題である。現実に関働しているのに、共働きを肯定しない回答が、夫の30%以上いたし、妻が働くことに対しても、迷いが感じられる回答が多かった。

日本の経済行為への批判が、国際的にまで高まっているのは、もう、この“無理した繁栄”の限界がきた、と受け止めるべきではないだろうか。業績、利潤、拡大の方に、つい顔も体も向いてしまう男たち（最近はお女もちらほらいるが）に、本当の豊かさを実感させるには、まず、あなたの隣にいる男の生き方を、問うてみるところから始めなくてはならない。

■ 筆者紹介 ■

本業は、神戸にある某生協職員ですが'88年4月から、兵庫県家庭問題研究所の仕事も兼任しています。おなかの大きい時に共同執筆した『女の本がいっぱい』（創元社、1987）がデビュー（!?）作。結婚したらおしまい、の人生じゃなくて、結婚、子育てと通るたびに、書きたいこともやりたいことも増えていく人生がいいですね。戸籍姓は金井塚ですが、なるべく旧姓（本名、と本人は思っている）の一海でモノを書きたいと思っています。1960年生まれ。神戸市在住。

ニュービジネス

「銀ちゃん便利堂」はお年寄りのための生活用品店です。

田中直子

「銀ちゃん便利堂です」と言うと、聞かれた方は「何でもやってくれる便利屋さん？」という風によく言われます。実は、「銀ちゃんの便利堂はお年寄りのための生活用品店なのです」と言うと、今度は「何だ、老人介護用品店か」と多くの方は言われます。しかし、私達は再び「いいえ、生活用品店です」と言いたいのです。それは、私達がこの店をはじめようと思った時から、ずっとこだわってきたこととして、「決して介護者にだけ都合のよいものや、一見便利そうでもお年寄り自身の自立の力をそぐようなものは置きたくない」という気持があるからです。お年寄り自身が体の衰えを補い、生活の場を広げていくことの援けとなるような品物を扱うことを心がけています。小さな店内には、まだまだ元気な人にもちょっと便利なものや楽しいものから、障害をもっている人にも役に立つものまで様々な品物で溢れています。

現在店は、10人の女性スタッフでやっています。塾を経営している人、食堂をやりながら、又、学校の先生や会社に勤めながら休日を利用して等、立場は違えど、「老いを自分達のこととしてひき受けていきたい」という思いを同じくして集まりました。

商品の仕入れから、お客さんの要望まで個性豊かな面々が、それぞれの視点から意見を言い、皆で考えていく……そんなやりとりの中で、少しずつではあるけれど、納得のいく形で動いてきた店です。

老人ホームでの多少の経験者はいても、特にこの道でのエキスパートとは言えません。まして商売となると皆素人と言えるにもかかわらず、こうしてやってこれたのは、もちろん多くの方々の協力あってのことなのですが、何かというと皆が集まって、知恵を出し合いすすんで口をはさんでいく——といったような全員の熱気が自ずと伝わり、店の魅力になっているのではと自負しています。素人だからこそ、既存のイメージにとらわれず、のびやかに発想できることも確かでしょう。

今年8月、開店1周年を迎えることができました。そして何より去る10月10日に、念願の“オムツのファッションショー”を開催するに至りました。

老いて体の機能が衰え、ちょっとしたはずみの失禁は当たり前前で、それを消極的に考えるよりちょっとの工夫や自分に合ったものを見つけて、積極的に生活の場を広げてほしいのです。タイトルはズバリ「おもらしたかてかまへんやん」。多くの方から反響をいただきました。

2年目に入り、今までのつながりを大切にこれからは、もっと地域のお年寄りの方々とのふれあいの場をつくっていきたくて、スタッフ全員燃えています。「銀ちゃん便利堂」は西陣の真中にある小さな店です。ぜひおしゃべりしに来て下さい。

◎京都市北区寺之内七本松西入ル。◎電話 075-464-6015

◎朝10時～夕方5時半

◎水曜日が定休日です。



(写真・ふじ みつこ)

連載

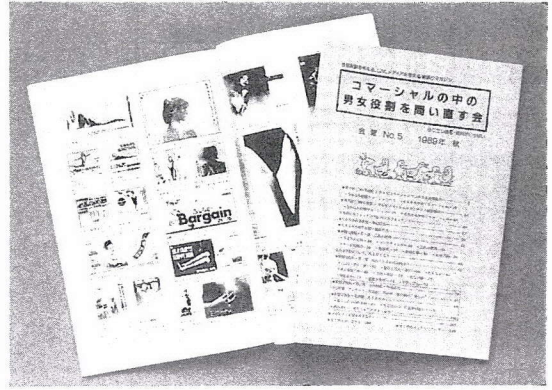
ミニコミの女たち

第30回

<コマーシャルの中の 男女役割を問い直す会会報>

コマーシャルの中の
男女役割を問い直す会

小川 真知子



「私を、オモチャにして下さい」左頁右上

こんにちは。いつもミニコミの女たち楽しみにしています。だから今回ここに載るのは、すごく光栄です。ほんとに。

さて私たちのグループは、名称がそのまま活動内容という、実にわかりやすい会です。

設立は1984年10月。世話人は4人。主な活動は、4月と10月に CM コンテストを行い、結果を会報にまとめて公表すること。

そもそも会を作った目的が、固定化された性役割を押しつける CM はもうたくさん! もっと自由な男女を描いた CM が見たい! というものだったので、CM コンテストもその趣旨でやっています。

コンテストの方法は、会員・友人にアンケートで「これはいい」「これはひどい」と思う CM を三つずつ挙げてもらう。世話人がチェックした CM と合わせ、点数制で投票し、ベスト、ワースト CM を決めます。そして、①なかなか好感 CM ベストテン、②そろそろやめて CM ワーストテン、にまとめて発表します。

私たちは、NO! を言うだけじゃなくて、こうしてほしいと提言する形の活動を目指しています。だから、①に対しては、この CM のここが素晴らしいと制作者をほめちぎるし、②に対しては、ここが嫌だから、こういうふうに変えてほしいと提案しています。

フェミニストはまだまだ少数派。でも CM の制作者にも隠れフェミニスト(?)はいるはず。だから私たちはそういう人達に声援を送るつもりでシコシコ冊子を作っています。そのうち電通や博報堂から性差別チェック顧問に依頼されるのを夢みて、CM にイチャモンつけるのは、アクセス権のりっぱな行動だい! と楽しんでやっています。

さて第9・10回のコンテスト結果をまとめた会報がこの10月に出了ました。

実はしばらく会報がお休みだったので、今号は「性別役割を考える、CM、メディアを考える欲張りマガジン」

と銘打った、本当に情報満載の欲張りな内容になりました。

特におすすめは、新聞・雑誌広告特集です。'87年10月から'89年4月までに掲載された新聞広告を中心に、「なかなか好感」広告13点、「そろそろやめて」広告40点を、写真入りで紹介しています。

順位はつけていませんが、私が特にひどいと思ったのは、創文αというワープロの広告。THE COMPUTERという雑誌に載ったもので、ポニーテールの10代の女の子が、上半身裸で、横顔が見える程度に後ろを振り返った写真に、「私を、オモチャにして下さい」というコピーがついている。性の商品化というより、性暴力といった方がいいようなひどい広告だと私は思いました。

他に資料として価値のある新聞抜切帖。広告、商品、性の商品化について、それぞれ検索できるよう日付け入りで詳しくまとめています。この会の呼びかけ人で、世話人の一人の吉田さんが根気と根性で集めた情報です。

メンバーは他に朝倉さん、寺井さんと私の4人ですが、仕事も個性も美意識も全然違う人ばかり。だから CM コンテストの集計の日は大変です。性役割の押しつけ反対は一致していますが、とにかく議論百出、意見と異見のぶつかり合い。でもこの違いを大切に「楽しく息長く」やりたいと思っています。

10年続けて、ベスト、ワースト企業の表彰式を派手にやりたいと思っていますのでお楽しみに。

会報第5号 B5版112頁 800円

(松香堂で扱ってます。是非買って下さい)

定期購読申込 郵便振込 神戸2-8197

コマーシャルの中の男女役割を問い直す会

2年間4号分 3400円(送料共)

連絡先 〒569 高槻市天川新町14-11

小川 真知子

☆CM コンテストに参加したい人は上記まで連絡下さい。アンケート用紙送ります。

現在ウイメンズ ブックストアで扱っているミニコミ

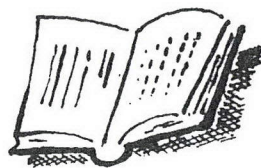
(第32号発行後に入荷したもの)

- | | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>「れ組通信 No. 29—中村遊さん大いに語るほか」
れ組スタジオ東京 1989年 8月 400円</p> <p>「れ組通信 No. 30—セクシャリティは分からないけど♀♀といい関係作れたら」 1989年 9月 400円</p> <p>「れ組通信 No. 31—特集・ときめきの東北合宿」
1989年10月 400円</p> <p>「WIFE No. 219—特集—一家の子は保育園育ち」
1989年 9月 460円</p> <p>「WIFE No. 220—特集—一家にいてできる仕事」
1989年10月 460円</p> <p>「We 10月号—特集 食べものから地球をみる」
1989年10月 567円</p> <p>「We 11月号—特集 からだ—その不思議」
1989年11月 567円</p> <p>「婦人通信 9月号—逆縁 書くということ 大学Ⅱ部のこと」 日本婦人団体連合会 1989年 9月 250円</p> <p>「婦人通信10月号—アジアのこと, 日本における外国人労働者のことほか」 1989年10月 250円</p> <p>「婦人通信11月号—20代独身男性, いまを語る ライセンスと実力ほか」 1989年11月 250円</p> <p>「月刊家族第42号—中学生たちの夏休みケッコウ気を使います, 親とのつきあいほか」 1989年 8月 200円</p> <p>「月刊家族第43号—南ア女性作家アバルトヘイト下の家族を語る」 1989年 9月 200円</p> <p>「月刊家族第44号—ブックス家族オープン記念シンポ20代の HER STORY—女の時代というけれど」
1989年10月 200円</p> <p>「月刊家族第45号—特集 日本・アメリカ ティーンたちの生と性」 1989年11月 200円</p> <p>「野合 (愛と性について考えるミニコミ) Vol. 12」
1989年 7月 100円</p> <p>「野合 Vol. 13」 1989年 8月 100円</p> <p>「野合 Vol. 14」 1989年 9月 100円</p> <p>「行動する女 No. 37—日米・七夕ゼミナール 日本の女・アメリカの女」 行動する女たちの会
1989年 7月 200円</p> | <p>「行動する女 No. 38—“悪意なくとも性の商品化は女への暴力” 三楽の性差別ポスターに抗議し撤去させる」
1989年 9月 200円</p> <p>「瓢騎ライフ No. 5—スコール! ゲイパレードほか」
1989年10月 600円</p> <p>「コマーシャルの中の男女役割を問い直す会会報 No. 5—第10回テレビコマーシャルコンテスト結果報告ほか」
1989年秋 800円</p> <p>「シネマジャーナル No. 12—女性監督関口典子インタビュー 『戦場の女たち』で私が描きたかったことほか」
1989年 8月 400円</p> <p>「女性まちづくり会議・報告書 No. 11」
1989年秋 100円</p> <p>「地域—大家族第32号—特集 性暴力」
1989年10月 200円</p> <p>「第7回女性による老人問題シンポジウム報告集—女たちは日本の老人福祉に発言する」
高齢化社会をよくなる女性の会 1989年 8月 1500円</p> <p>「女解放第2集—反母性論—再論」 主婦戦線
1988年 6月 1000円</p> <p>「1980年代パート・タイマー白書—パート・未組織労働者連絡会10年の活動記録」 パート・未組織労働者連絡会
1989年 6月 1500円</p> <p>「教会と女性第2集—結婚式式文の性差別を検証する」
神奈川教区婦人問題小委員会 1989年 6月 500円</p> <p>「鳥賊 No. 34—ヤングアダルトによるお盆特集」,
1989年 200円</p> <p>「鳥賊 No. 36—12日間アメリカ一周 アメリカのY・A図書館&Y・Aブックス見学ツアー」 1989年 200円</p> <p>「鳥賊 別冊 Vol. 37—とっっても素敵な図書館員特集」
1989年 200円</p> <p>「月刊ちいきとうそう225号—せつけんと界面活性剤問題 朝シャンブームの中で」 1989年 9月 618円</p> <p>「JAPANESE WOMEN No. 62」 1989年 9月 103円</p> <p>「児童文学評論 No. 25—特集 〈家族〉」
大阪新児童文学会 1989年10月 1200円</p> |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

— 書 評 —

『アリスの穴の中で』

上野 瞭 著



新 潮 社

表題はウサギの穴に落ちてしまった夢物語『ふしぎの国のアリス』のパロディである。ただしパロディ版は夢に終らず、現実主人公が妊娠するのである。男の妊娠という設定の特異さに魅かれて一気に読める。

去年出版された村田基『フェミニズムの帝国』が、二百年後の東京を舞台に、女と男の立場を逆転させて、現在の性差別の愚かしさを浮かび上らせたのに続く、小説ならではの奇想天外さである。だから先へ先へと興味をそそる。

壮介の妊娠と叔母ゆきの老人呆けとの二つのモチーフが、人生の入口と出口とを暗示しながら、現実と夢の錯綜した状態でストーリーが進められている。

妊娠の事実困惑し、呪い、幻覚症状まで起こす壮介の狼狽ぶりは、ほとんど醜悪でさえある。他方、ゆきは戦争だ、国家だと大言壮語を吐いてきた男が動かす世の中を軽蔑し拒否し、いっそ男が子供を産んでみたら女の気持がわかるのではと思うのである。分娩中の壮介が幻覚の中で聞いたのは「昔から女だけが人間を産んできたことを男は不思議とも、不公平とも、損だとも思わなかった。その方がよほどおかしい。男は命を産み落とすことより、それを壊すことに夢中になっていた」というゆきの声であった。

女性の時代ともてはやされる中で、いま男のフェミニズム論議が盛んである。自分の性が背負う重荷に気付き始め、男性性を、そして男女の力学関係を問い直そうとする男たちも増えているようだ。先日新聞で、パパのための授乳用ブラジャーの写真をみた。パットの部分にミルクが入り、先端はゴムの乳首が付いていて吸える仕組みである。ブラは「女性抑圧のシンボル」と敬遠する女性がいる一方で、「男性にも授乳の喜びを与えよ」というわけだ。男らしさを強要されて、「男もつらいよ」型よりネアカである。とあれ男もさまざま。だがひげのあるマリア、壮介はこの種の男ではない。受胎は壮介の内なる男の変革を意味しなかった。その証拠に生まれた子供は、壮介の娘が自分の子として育てるのであり、壮介は何食わぬ顔で再び出社するのである。だがそれ以上に私を最後まで不安にさせたのは、祝福されずに生れ出た子供の運命であった。索漠とした愛不毛の荒野に子供の受難曲だけが響いている。

栗原 葉子 (著述業)

上記の書評欄へ投稿をお待ちしています。

女性の目で見直した鋭い批評や、視点を変えたユニークなものをお寄せください。

400字詰原稿用紙に2枚、900字前後です。住所とお名前、電話番号も原稿用紙にお書き添えください。掲載させて頂いた方には薄々謝、進呈致します。

「あなたの情報・私の情報」とコラム「私の出会った本」をあなたの主張、伝えたいこと、知って欲しい本、御意見等に御利用ください。600字以内。住所とお名前、電話番号を原稿用紙にお忘れなく。但しこの欄は申しわけありませんが薄々謝も差し上げられませんので念のため。誌面の都合で短くすることがあります。

宛先は 602 京都市上京区下立売通西洞院西入松香堂書店「ウイメンズ ブックス係」です。

上記両方とも次号の締切りは 1990年1月20日。

編集室から

◎ずいぶんご無沙汰していた感のある「老後問題」の本の特集しました。『老婚ばんざい』という本まで出ています。人生80年時代、老婚もまたよし。

◎男性の家事分担に関する本、男性の老いを問う本が登場。いよいよ90年代には男性の自己変革が迫られることでしょう。

◎11月16日、わが国初めてのセクシュアル・ハラスメントの初公判が福岡地裁で開かれ、各地から大勢の女性たちが支援に駆けつけました。職場の男女のパートナーシップが望まれます。本号でもセクシュアル・ハラスメントに関する本を紹介しています。

◎次号は1990年2月20日発行の予定です。(木下明美)